

下部消化管領域における 取り組み

医療法人六花会 館林記念病院 診療放射線科 | 岩宗裕人

技師法改正は診療放射線技師が実施できる下部消化管検査(注腸X線検査と大腸CT検査)において二刀流への免許皆伝となった。大腸CT検査は診療放射線技師が患者説明から一次読影まで一貫して実施できる検査である。

Last year's amendment to the Japanese Radiologic Technologist Act allows radiologic technologists to perform enema X-ray and CT-colonography (CTC) under the direction of a physician. For CTC, radiologic technologists can perform the entire process from patient explanation to primary interpretation of the radiogram. Although total colonoscopy is the gold standard in Japan's colorectal cancer screening precision examination, CTC is in demand as an option.

告示研修への期待

告示研修は、診療放射線技師に課せられた義務研修である。そのため、診療放射線技師免許を持つ者は研修を受ける義務がある。今回の下部消化管検査に関わる項目は、大腸CT検査が主である。このことは言い換えると、大腸CT検査は診療放射線技師に任された検査になったと言っても過言ではない。

大腸CT検査の歴史は、1994年にVining氏が大腸CT検査を報告し、国内においては、2011年に炭酸ガス自動送気装置が薬事承認され、2012年には、大腸CT検査加算が保険収載された。また2015年には大腸CT検査専用バリウム製剤も薬事承認と保険収載された。大腸CT検査は、保険収載されまだ10年しか経っていない。

告示研修が普及への拍車になることを期待している。

CT検査について

国内のCT台数は先進国においても圧倒している(図1)。これは日常診療において診療放射線技師の業務としてCT検査は主たる業務であることを示している。下部消化管検査といえば、1990年代は注腸X線検査が主であった。肛門側より逆行性にバリウムを大腸に注入し、空気を送気し、二重造影法の撮影を行ってきた。全大腸内視鏡検査の普及とともに注腸X線検査は置き換わってきたが、今もなお術前などの精密検査としての注腸検査は地位を築いている(図2)。注腸X線検査は、診療放射線技師が担ってきた検査の

一つであるが、昨今、地域によっては検査数の減少と技師の教育・育成が難しくなっている。消化管の検査は技術や経験の要素も大きく、後世を育成していくには課題が残る。往年の先輩技師が引退されていく中で、技術を継承していくことも重要である。CT検査は技師の主たる業務でもあるため、CTに触れる機会は多い。下部消化管検査に追加された大腸CT検査は今後の技師の大腸検査の一つとして習得しておくことが望まれる。全大腸内視鏡検査の代替手段として、選択肢として大腸CT検査には需要がある。

CT検査に携わっている技師は多い。それを示しているのがX線CT認定技師の数である。認定者5,026名と多くの方が取得されていることが証明している。経営的な要素になるが、現行の診療報酬で算定できる大腸CT検査加算要件は確認して頂きたい。加算要件であることは重